



2024年度 第2回 瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し（2024年7月～8月）のポイント

(1) 概要：

シラスの漁獲量は平年並みか平年を下回る海域が多い。

カタクチイワシ（小羽から大羽）の漁獲量は平年を上回る。

(2) 海域別：

紀伊水道東部のシラスは前年同様、平年並み。

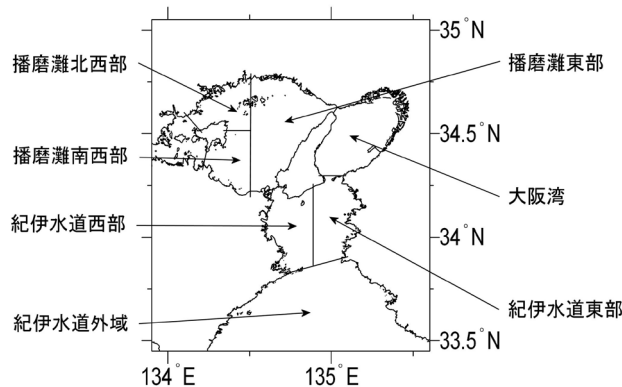
紀伊水道西部・播磨灘南西部のシラスは不漁であった前年を上回り、平年並み。

大阪湾のシラスは不漁であった前年並みで、平年を下回る。

播磨灘東部のシラスは不漁であった前年、平年を上回る。

播磨灘北西部のシラスは不漁であった前年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾のカタクチイワシは好漁であった前年並みで、平年を上回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：浮魚資源部（廿日市） 山下、河野

電話：0829-55-0666、ファックス：0829-54-1216

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2024年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し（2024年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部では2023年同様、平年並み。

紀伊水道西部・播磨灘南西部では不漁であった2023年を上回り、平年並み。

大阪湾では不漁であった2023年並みで、平年を下回る。

播磨灘東部では不漁であった2023年、平年を上回る。

播磨灘北西部では不漁であった2023年を上回るが、平年を下回る。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では好漁であった2023年並みで、平年を上回る。

標本漁協、もしくは標本船のシラス漁獲量を各海域の代表値として予報を作成した。2014年～2023年の平均値を平年値とした（図1～図5）。

2. 漁況等の経過（2024年4月～6月）及び今後の見通し（2024年7月～8月）についての説明

(1) シラス漁況

紀伊水道東部（和歌山県側）では5月の漁獲量は前年の519%、平年の97%であった。

紀伊水道西部（徳島県側）では5月の漁獲量は前年の292%、平年の72%であった。

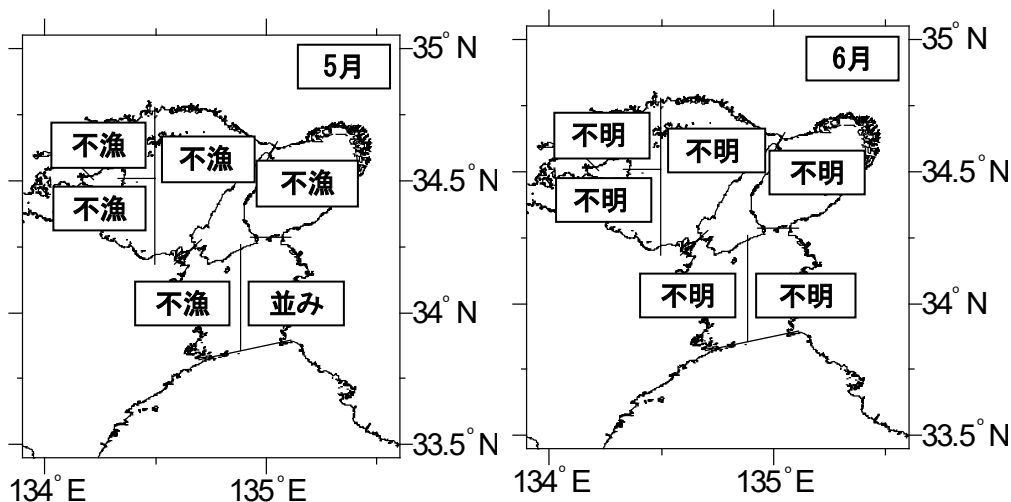
大阪湾（大阪府）では2024年の漁は5月10日から始まった。5月の漁獲量は前年の171%、平年の49%であった。6月上旬も低調に推移している。

大阪湾（兵庫県）では2024年の漁は前年より11日遅い5月20日から始まった。5月の漁獲量は前年の85%、平年の18%であった。

播磨灘東部（兵庫県側）では2024年の漁は前年より2日遅い6月3日から始まり、5月は漁獲がなかった（前年0トン、平年77トン）。

播磨灘南西部（香川県側）では2024年5月下旬から漁期入りしたが、魚影がみられないために操業がほとんど行われず、5月は漁獲がなかった（前年0トン、平年9トン）。

播磨灘北西部（岡山県側）では5月に漁獲したもの、漁獲量は少ない模様。



2024年5月～6月のシラス漁況

(2) カタクチイワシ卵と仔魚

紀伊水道西部（徳島県）における5月の卵密度は前年の96%、平年の92%であり、仔魚密度は前年の222%、平年の269%であった。大阪湾における5月の卵採集数は前年の896%、平年の276%であり、6月は前年の452%、平年の201%であった。同海域における5月の仔魚採集数は前年の534%、平年の210%であり、6月は前年の69%、平年の58%であった。播磨灘全体における6月の産卵量は前年の311%、平年の219%であり（図5）、播磨灘東部（兵庫県）では前年の228%、平年の321%、播磨灘北西部（岡山県）では前年の144%、平年の28%、播磨灘南西部（香川県）では前年の54765%、平年の141%であった。播磨灘南西部（香川県）における6月の仔魚採集数は平年の78%であった。

(3) 黒潮流路の現況と今後の予測（2024年7月～8月）

6月18日現在、黒潮は室戸岬沖から大きく離岸し、大蛇行流路となっている。各岬における黒潮離岸距離の変動傾向と水産研究・教育機構運用の海況予測システムFRA-ROMS IIによる予測結果、及び最近の黒潮流路の推移等を併せて考慮すると、黒潮は一時的に紀伊水道付近に接近する可能性があるものの、概ね離岸傾向で推移すると予測される。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会を参考にした。

(4) 今後の見通し（2024年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

本漁期に黒潮は離岸傾向で推移すると予測されており、今後、外海発生群の漁獲はあまり見込めない。

紀伊水道東部では外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推察されるが、今後の漁況は主に内海発生群に左右されると考えられる。本海域における5月のシラス漁は平年並みであった。大阪湾での6月の卵採集数は2023年、平年を上回っているが、仔魚については2023年、平年を下回っている。これらの状況から判断すると2023年同様、平年並みと考えられる。

紀伊水道西部でも外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推察される。紀伊水道および周辺海域の産卵状況から判断すると、不漁であった2023年を上回り、平年並みと考えられる。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。大阪湾での卵や仔魚採集数、および漁況から判断すると不漁であった2023年並みで、平年を下回ると考えられる。

播磨灘東部では内海発生群が漁の主体であり、6月の水温が低いほど7月～8月の漁獲量が多くなる傾向がある（図6）。6月の産卵量は2023年、平年を上回っており（図5）、播磨灘全体での水温は平年並みである（ $-0.5^{\circ}\text{C} \leq \text{平年値との差} \leq +0.5^{\circ}\text{C}$ ）。したがって不漁であった2023年、平年を上回ると予測される。

播磨灘南西部も内海発生群が漁の主体である。6月の産卵量や仔魚採集数から判断すると、不漁であった2023年を上回り、平年並みと考えられる。

播磨灘北西部も内海発生群が漁の主体である。6月の産卵量から判断すると、不漁であった2023年を上回るものの、平年を下回ると考えられる。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では漁期当初に2023年発生1歳魚、その後は2024年の春シラス漁で漁獲の対象となった0歳魚が小・中羽として漁獲される。2024年5月のシラス漁は2023年を上回っているものの、平年を下回っている。しかしながら2023年夏季から秋季の発生群が多く、これが継続的に漁獲されていることから、本漁期のカタクチイワシ（小羽から大羽）は好漁であった2023年並みで、平年を上回ると考えられる。

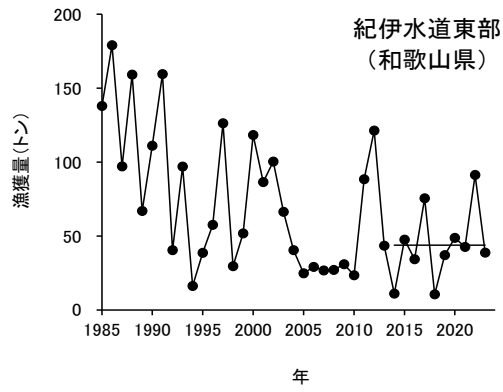
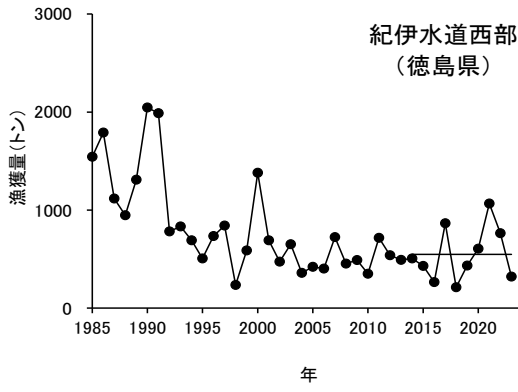


図1 紀伊水道の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

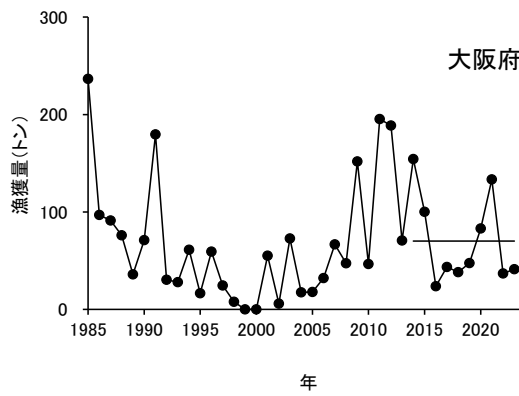
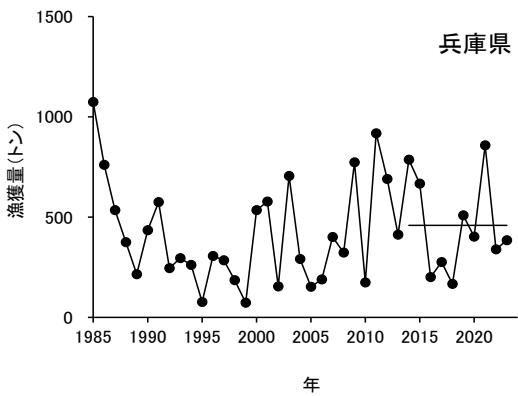


図2 大阪湾の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

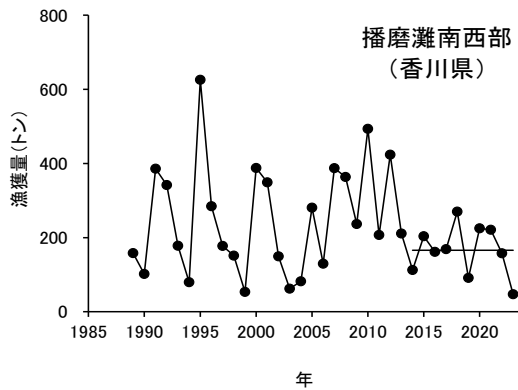
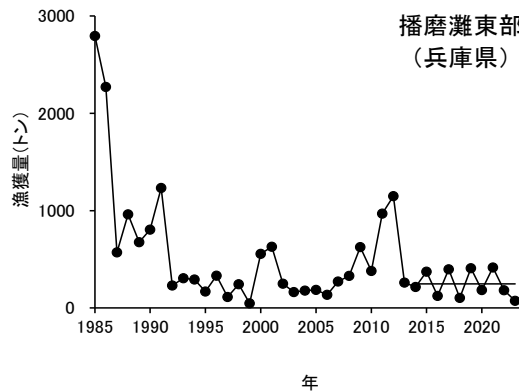
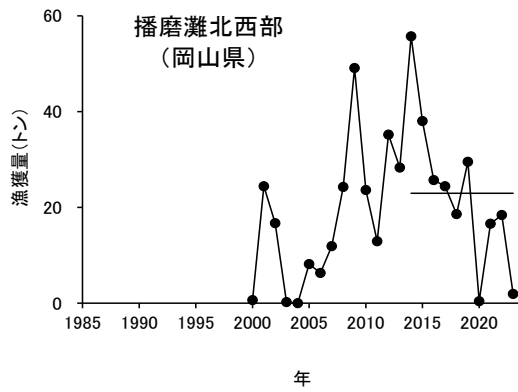


図3 播磨灘北西部の標本船、東部及び南西部の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

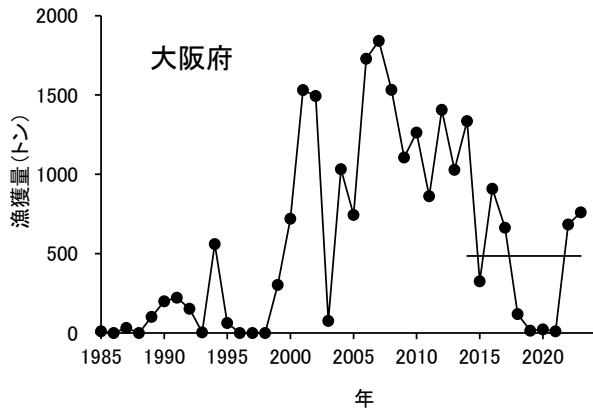


図4 大阪湾の標本船における7月～8月のカタクチイワシ漁獲量（実線は平年値）

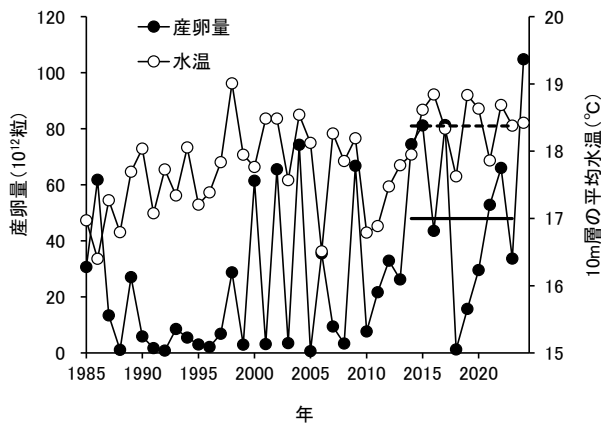


図5 播磨灘における6月の産卵量と10m層の平均水温（実線は産卵量、点線は10m層の平均水温の平年値）

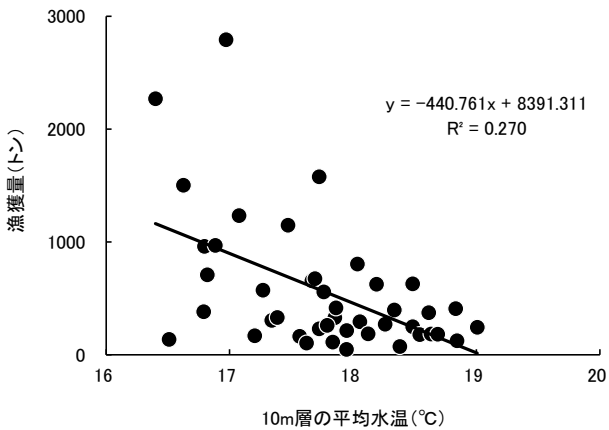


図6 播磨灘の6月における10m層の平均水温と播磨灘東部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

参 画 機 関

<p>和歌山県水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター</p> <p>兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター</p> <p>岡山県農林水産総合センター水産研究所</p>	<p>香川県水産試験場</p> <p>徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課</p> <p>(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p>
--	---